

## 子供のスポーツ振興について

- 子どもたちが小さい頃から様々な形でスポーツに関わることによって、他者を思いやる能力を伸ばしていくことができる。
- 中学校で部活動に入らない人が増えると、青少年がスポーツを始めるきっかけはなくなってしまう。教育の現場でスポーツを実施できる仕組みを作ることが重要。
- ここ数年、生徒たちから、入学した学校でやりたい種目ができないという声をよく聞く。どの部活を、どのような指導者で実施するかという点は、青少年のスポーツのきっかけとして重要な課題である。

## パラスポーツについて

- 障害者のスポーツ振興において、多様性への対応が課題。実施率をより上げていくには、アプローチの方法やサービスなど含め、丁寧な対応が求められる。都がトップランナーとして、他の地域を引っ張ってほしい。
- 障害の種類や重度等に関わらず、すべての人がやってみたいと思ったときにできる環境が、身近にあることが大切。
- トップアスリートや指導者へのインタビューを実施し、広報を行うことで、パラスポーツを応援したい気持ちを喚起できるのではないか。

## 他分野との連携について

- 例えば、「デジタル技術×応援」など、各項目の関連や結び付けによる相乗効果も示していけると良い。
- 「スポーツ×〇〇」という形で、文化や芸術、音楽と関連させることで、社会の中でのスポーツという位置付けができ、スポーツに関心がある人だけでなく、より多くの人に広げられる。
- 高齢化も進む中、健康づくりはスポーツの価値の中核にある。身体活動を通した生活習慣予防の予防について、部局横断的な推進に期待したい。

## 計画の推進に向けて

- 選手と都民双方のために、トップアスリートと社会の関わりは増やしていくべき。学校に派遣することが一番ポピュラーな方法ではあるが、子どものみならず、高齢者など、いろいろな人と触れ合う場を提供することが重要。
- デフリンピックの認知度が上がったのは良かったが、これからさらに上げていくのは大変である。健常者の方への理解を深め、大会を盛り上げていくには、市町村との連携が必要。
- 特に多摩・島しょ地域では、近隣にスタジアムがなく、交通網も不便。スポーツ観戦について、パブリックビューイングなど離れた地域の人々も見られるような、地域格差を埋める取組に期待。
- 小中学校のグラウンドは、立地がいいにもかかわらず開放されていないのが現状。開放率の向上や都民の利用は、今後の重要な指標になる。
- スポーツを支える喜びは日々実感している。実際に、スポーツボランティアを行っている人は、幸福度が高いように感じている。
- 今後、この計画をメディアに取り上げてもらいたい。かなりボリュームがあるので、見出しとなるポイントをアナウンスするなど工夫が必要。
- この計画を棚に置かず、「見える化」から「わかる化」を経て、「実行」につなげていかなければならない。